



「第二次日本経穴委員会」便り

～第6回 経穴検討内容～

第二次日本経穴委員会作業部会委員 かわはらやすひろ
河原保裕

昨年10月の「WHO第3回経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議in京都」も無事終わり、経穴の本、古典の本とのにらめっこもしばらくはお預けとし、ほんのつかの間の休息時間である。また12月から第2ステップ（韓国での国際会議）へ向けて始動する。

京都會議の内容はすでに報告（2004年12月号）させて頂いているが、報告の中で3カ国非同意穴92穴のうち部位の再検討が必要な保留穴が15穴残っていると報告されている。な～んだ！あと15穴か……と単純に思っただけではない。この15穴は3カ国での部位の相違であるが、部位は一致していても3カ国での表記（表現）の仕方が異なり、各国持ち帰りの宿題も多い。その数は29穴。例えば、部位を表現する時にどこまで筋肉・血管等を入れていくのか？解剖学的にランドマーク表現は正しいのか？各国の納得のいく表現であるか？など、非同意と宿題を合わせると44穴となる。今回は非同意穴と持ち帰りの宿題のいくつかを、私見を少し交えて簡単に紹介させて頂く。

非同意穴

〔足太陽膀胱経天柱穴〕

天柱穴は部位的には3カ国で微妙に位置がずれている。天柱穴の取穴部位は、日本の教科書

では瘰癧門穴が基準点となっているが、瘰癧門穴はWHOの基準穴になっていない。また韓国の教科書は第1・第2頸椎棘突起が基準となっていて、それが韓国の主張する天柱穴の解剖学的な基準点である。また正中からの距離は日本・中国は外方1.3寸であり、韓国は外方1.5寸である。しかし今回3カ国で取り決めた古典の資料には外方何寸との記載はひとつもないのである。また古典に記載されている後髮際を表記に入れるのかどうか？中国は筋肉を僧帽筋外縁と記載しているが、この部位では僧帽筋は薄く広がっているので実際には触知は難しいし、実際に外縁はもっと外方だと思われる。日本の教科書では頭半棘筋の膨隆部外縁となっているが膨隆部外縁とは筋溝となっている訳ではないので曖昧ではないか？などという問題で再検討穴となった。次回会議までに、日本案として天柱穴はここであるという根拠を挙げなければならない。

〔手厥陰心包経勞宮穴〕

勞宮穴は日本・韓国のテキストでは「手掌部にあり、指を屈し、中指と薬指の指尖が手掌に当たるところの中間に取る」としている。つまり第3・第4中手骨間になる。中国のテキストでは「手の手掌で、第2・第3中手骨の間で第3中手骨に寄ったところ、拳を握って指を屈したとき、第3指の指尖が掌部にあたる場所に

とる」とある。手厥陰心包経の流注を考えると、中衝穴（井穴）の日本・韓国の取穴部位は第3指爪甲根部角の桡側にあり、第3指の桡側を流れるのであれば中国案の「第2・第3中手骨の間で第3中手骨に寄ったところ」が正しいように思えてくる。では中国の中衝穴の位置はというと、第3指尖端である。他の手の井穴は全て爪甲根部にあるのに、なぜ中衝穴だけが尖端なのであろう？ 話しは少しそれるが、爪甲根部の外方1分の1分はどこからきたものであろう？ また、1分離れるのは外側（桡側・尺側）に離れるのか？ または上方（中枢側）に離れるのか？ もしくは斜めの方向なのか？ ひとつの経穴の疑問が別の経穴の疑問へと、どんどん膨らんでしまうのである。

各国持ち帰りの宿題

〔足陽明胃経不容穴〕

不容穴の部位は座標的には「臍上6寸で外方2寸」である。これは3カ国一致した意見であるが、肋骨弓の角度は個人差が大きく、人によっては肋骨弓下縁となるが、ある人は肋骨上もしくは肋間となってしまう（日本からの問題提起）。臨床をしていて、特に若い人達に肋骨弓の角度の小さい（狭い）人が多いと感じたことのある先生方も多いのではないだろうか？ 問題は取穴をするときに、座標だけを頼りに取穴して肋骨弓下縁にあたるのかどうかである。経穴の教科書などでは図版で肋骨下縁に示されている。経穴部位には腹直筋があるとも記載されている。しかし、肋骨弓の角度が狭く肋骨上に不容穴がある場合、それに該当しなくなる。これは経穴が体表に存在するという考えであれば大した問題ではないのであるが、そうでないのであれば肋骨下縁か肋骨上かは胸部か腹部かの

違いであり大きな違いである。個人的に穴位作用の面から分析をしてみると、中国の文献には不容穴の穴位作用として「調中和胃、健脾和胃」などが記載されている。足陽明胃経で見ると、胸部に存在する水突穴から乳根穴までの穴位作用は、肺・心・胸膈など上焦に関わる作用が記載されている。不容穴から外陵穴までは脾胃・胃腸など中焦に関わる穴位作用である。ということは、不容穴は腹部に存在する方が理に適い、やはり肋骨弓下縁に存在するものと推測できる。また肋骨弓の角度の狭い人に肋骨弓下縁で取穴をした場合、足陽明胃経の腹部の流注は正中（任脉）より外方2寸を流れているが、その距離も再考しなくてはなくなる。古代人（古典）と現代人（臨床）の骨格の相違を今後どのように受け入れ対応していくか、また世界共通の経穴スタンダード部位を作成するために人種の体格差（骨格差）をもクリアーできる取穴表現の仕方も課題の一つかもしれない。

最後に

これからの作業は、非同意穴の15穴と、各国持ち帰りの宿題と、今後行われる同意穴の再確認作業と山積みである。同意穴に関しても今回の宿題と同じように、部位は一致しているが表記（表現）方法で多くの問題が出てくるに違いない。

我々は大きな一歩を踏み出したが、結局、今までの作業で氷山の一角を確認できただけで、全貌を見渡すには、まだまだ時間のかかる作業を地道に進めていかなければならないことを再認識した。

(〒330-0802 埼玉県さいたま市大宮区宮町2-3-1
第二大矢部ビル2F アコール鍼灸治療院)